

【特集 衆議院選挙を終えて 1】

多様な個別運動の活性化を

——「あきらめムード」は払拭せよ——

【鼎談】 鎌田 慧・針生一郎・吉川勇一（司会）

（2005年9月18日、東京・水道橋で）

吉川 針生さんは8・15集会で、「今回の選挙の狙いが保守党内の多様性を排除してトッブダウン型の党構造に転換する意図をもつもの」として、警告されていましたが、この点はどうだったでしょう。選挙後、派閥の再編がまた始まっているようにも見えますが……。

改革をだれかに期待してはならぬ

針生 小泉は、党議拘束を強め、一枚岩に近い政党を求めたわけです。私の親友でもあったフランスの精神科医、フェリックス・ガタリが『分子革命』の中で、今は先進国の中ではロシア革命や中国革命のような一挙に体制が変革されることはありません、身近にある人権侵害のような事態に抗議し、それをつなげ、強めて変革を求めていく以外にはないと主張し、そして「トゥリー（樹木）型」から「リズム（地下茎）型」へといって、上から下まで一本化したような政党は現実には合わず、地下茎のように、政党员は底辺の市民運動の中に入っていったさまざまな問題にかかわり、自由に発言し、会議の中で協同してゆく原理を確かめ合うという柔軟なネットワーク型の政党に脱皮せねばならぬ、と提案しました。僕はそれにほぼ賛成で、労組依存の議員が過ぎつぎ落選した土井たか子時代の社会党の機関誌『月刊社会党』に書いたこともあり、凋落する社会党の脱皮の道はそこにはかない、と言ったのですが、手遅れでした。

選挙の問題点を郵政民営化だけにしてしま

ったことも大問題ですが、異論を許さず、「刺客」まで送り込むというやり方は、時代遅れというだけではなく、ファシズム化の危険すらあります。自民党は派閥があつて、つぎつぎと多様な意見が出てくることで政権を維持できていたのだが、それを壊し、小泉のようにワンフリーズしか言わず、政策は丸投げで、審議会や官僚に任せてしまふというやりかたは、実に危険だと僕は警告したのです。

選挙前に、そういう点についての知識人声明の準備も考えたのですが、八月一七日に、妻に死なれ、その葬儀などで時間がとれなくなりしました。知人の民主党代議士、仙石由人君にも文書を送つて、その提案をしたのですが、反応はありませんでした。

吉川 民主党指導部だつて、やはり党を一本化したいという点では、まったく同じですから、とても応じられなかったのでしょうかね。

鎌田 私は開票日の『東京新聞』夕刊に「笛吹き男の笛の音」という文を書きました。ドイツの民話、ハメルーンの笛吹き男に連れられて破滅にむかうように、「改革」という呼び声に釣られて地獄に向かう日本の姿を書いたのです。アウシュヴィッツの門に掲げられた「労働は自由にする」と「改革」の看板は同じです。

ハリケーン「カトリーヌ」で破壊された水族館から海に流されたイルカが、自力で餌をとることができず、逃亡もせず、救援にきた飼育係の前で芸を披露したというニュースが

ありました。私には、このイルカが日本人の姿に見えてしまうのです。日本では改革を自分の力でやったことがなく、いつも上から与えられてきたわけで、結局誰かがやってくれると期待するだけになってしまっているんですね。

今度、民主党党首にウルトラ防衛論者、前原誠司さんがなりました。自民党の圧勝は今度だけで、次回は違うと思います。しかし次回選挙でもしも民主党が勝ったとしても、結局は第二自民党になるだけで、翼賛体制のように与野党が全部つながってしまったんだ

と見なければなりません。国会の九割までが改憲派になった現在、これに抗し、改革をいっつも上のどこかに期待するという思考を、どう変えてゆくかが、これからの課題なのです。

吉川 人びとの態度の矛盾や誤りを、論理の力だけで説いてもそれを変えるのは難しいように思えるのです。九条の会は全国に広がっていますし、私たち市民の意見30の会・

東京が全力を挙げた反派兵・憲法改悪反対の意見広告運動も回を重ねるごとに驚くほど多数の賛同者を結集しています。これらの運動は、反改憲派の結集の上で非常に大きな役割を果たしています。しかし、仮に潜在的な反改憲派の力を全部結集しえたとしても、それで多数派が形成されるのかどうかは危ないところです。すでに安保、自衛隊の存在などは、世論調査の上では承認が過半数を占めています。とすると、防衛のためには軍事的な防御力が必要ではないかという意見の人びと、

あるいはそういうことに関心がなく、小泉さんなら頼れるのではないのといった人気投票みたいな人びとを、どうしたら非武装・不戦の側に変えさせられるのか、という努力がされねばならないのですが、そのためには、理屈だけで説得しようというのではない、別の次元の努力があるのであるという思いです。これは、宣伝の仕方、ビラの書き方というような、技術的な次元の問題ではなくです。

針生 ベンヤミン（ヴァルター）が、アドルノ（テオドル・W）らのグループで、はじめは啓蒙というようなことを言っていたのだが、ナチスが魔術的に大衆を組織し始めたとき、こちらでも文学・芸術など、一種の魔術性を持つていたものをもっと積極的に行使しなければならぬと主張しました。私はそれを読んで、なるほど、ベンヤミンともなるとそういうことに気づいていたんだな、と思いました。

全面的に敗北しているのではない

鎌田 吉川さんは、市民的不服従——いかなる権威にも強圧にも屈せず良心に従って行動することの重要性をいわれていますが、そういうことが出来るのはごく少数にかぎられます。まずは、そういう事態にならないようにするにはどうしたらいいかに知恵を絞らねばなりません。昨日でた集会でも、もしかしたら、まもなく、こうした集会にも憲兵が臨検して「弁士中止！」などと言うようになるかも知れぬ、と冗談めかして言ったのです

が、「共謀罪」の法制化もまた登場してくることは必至でしょう。

55年体制、社会党・総評中心時代の運動では、たとえば集会のもち方ひとつとっても、壇上に偉い人が並び、何万人が集まったから成功した、というようなイメージがあったのですが、これからは針生さんが言ったような「リズム型」あるいは「コミュニケーション型」でゆかねばならぬでしょう。その意味では、彼我の力関係で全面的に敗北をしているというわけでは決してなく、川辺川（熊本県）ダムは多分出来なくなるでしょうし、諫早干拓にしても最終判決では負けましたが、ギリギリのところまで追い詰め、問題は続きます。新潟・巻原発も中断させていますし、能登原発もそうです。これまでは、地域のそうした住民運動は、すべて国家権力の強権と企業の金力で全部潰されてきたわけですが、今ではそれが潰されずに地域の中に根を張って残っているという面があります。全部敗北してもう終わりだというのはなく、小さいながらもそうした住民・市民の運動をどう繋げてゆくのかというメッセージを送らねばなりません。どうも選挙後に諦めムードが広がっているようにも思えるのです。

針生 かなり強く出てきているようですね。

吉川 マスコミの上では、選挙結果を与党大勝利、自民圧勝などどくっけていますが、それは現在の小選挙区制の悪影響が極端に出た結果であって、議席数の比は得票率に合致し

ていません。自民・公明両党の議席は68パーセントですが、得票数は、比例代表で51パーセント、小選挙区で49パーセントと、半数です。今の政権が国民の圧倒的多数から支持を受けたとは言えないということは、まず最低限、確認しておかねばならないでしょう。

「最後の線」に賭けるのではなく

吉川 もうひとつ、こちら側の問題としては、今鎌田さんの言われたことと関係すると思うのですが、憲法改悪阻止の運動のあり方があるように思います。九条改変を阻止するため的大結集が必要だということが、今強く叫ばれています。九条さえ守ればいい、と絞りきっていいのかという問題があるように思います。各地の反原発闘争だの、環境保全の運動、さらには女性の地位・権利や、弱者の生活保障の問題、あるいは反天皇制の運動などは、必ずしも含まれなくなってしまう。反天皇制など、第一条の問題などは、しばらくは出さないでもらいたい、というように外される傾向が出てくるかもしれません。それでは、鎌田さんの言われるリゾーム型の結集にはなりません。

針生 自民党がその明治憲法型の哲学を前面に押し出した改憲論を出してくれば、国民投票で敗北させられるのではないかと思っただけのことであつたのですが、実際は、九条の第一項は残し、防衛力と自衛権の承認、国際協力の名の下での海外派兵（集団的安保）を入れる

程度の改憲案を出してくるようで、そういうある意味では曖昧路線の改憲だと、かなり危ういと思えてきています。

鎌田 『朝日』の論説で、自民党案は思っていたほどひどくないではないか、というような評価が言われましたが、危険ですね。今度三分の二の議席を確保しましたから、集団自衛権の問題など、もっと明確に出してくるかもしれません……。

吉川さんの言われたことに続けると、これだけは譲れぬという最後の防衛線は九条だという風になつてきているようですが、それは三里塚闘争で言えば、岩山大鉄塔決戦にすべてをかける、あるいは三池闘争だとホッパー決戦に賭けるというような具合で、最後の線だけに集中してしまうと、それを支える周辺の無数の運動が弱くなってしまうのです。周りを豊かにして中心を包み込むことが大事なので、まだいくらかは時間があるわけですから、もう少しさまざまな運動を強くして、憲法九条の周辺に結集してゆくということがさねばなりません。

国会では、民主党の一部を除いて改憲派に組み込まれ、共産党の九議席と社民党の七議席だけが、護憲勢力なわけですけれども、九条という幹を倒させぬためにも、それを支えるリゾーム、根をどう強く豊かにしてゆくかが、今後力を入れるべきです。最後の線では死んでも頑張る、というのではなく、今の日常生活の中で、やれること、やるべきこと

に努力することが大事です。

針生 日高六郎さんの米寿祝を兼ねた出版記念会でも、あるいは八・一五集会でも、日高さんの話は、悲壮感と焦りが目立ったという批判もあるようです。しかし、日高さんは、憲法に触れて、九条だけでなく、大事なのは主権在民という問題で、これを強く意識した運動が必要だと強調しています。ここは評価すべきでしょう。

鎌田 昨日出た集会でも、「もうお先真つ暗だから、あとは戦争でまた負けたらいい」などという意見まで出てくるんですよ。あきらめムードからね。

吉川 よく言うんですが、小松左京の小説のように日本が沈没するだけならいいんです。しかし日本が沈没する地震が大津波を起こし、朝鮮・韓国、中国、フィリピンなど、周辺諸国を巻き込む大災害を起こしながらというのは、絶対に避けねばなりませんから。

鎌田 今度の選挙でも「改革」という呪文に、フリーターの問題やら、失業やら、年金やら、民衆のさまざまな期待や要求が絡めとられたわけですが、本来ならそれは運動として組織されるべき可能性のあつたものなんです。それを取り戻せるような運動を今、どう再構築するかが問題なのです。

主張を後退させてはならぬ

吉川 私は、ここ数年、小林正弥さんの自衛

権・自衛隊容認・九条改定不要という非戦論への批判をしてきましたが、この六月には、和田春樹さんや前田哲夫さんら四人の連名で「平和基本法」再論が提示されました。譲りに譲って、最低限こならばという防衛線として「最小限防衛力」を認めるという案ですね。運動の中でも、社民党を始め、自治労、日教組、あるいは一部の市民運動にまで、その案で闘うのだという勢力が増えてきています。そういう立場の勢力を敵にまわすわけでは決してありませんが、しかし結集のためにはその問題は今は伏せておいて、あるいは触れないで、というわけにはゆかないと思います。「反戦原理主義」というわけではありませんが、安保条約の問題や日本の絶対非武装の主張は、今強く提示すべきだと思います。

鎌田 参議院の郵政民営化反対の議員たちも、ほとんどその立場を変えてしまいました。学者だの議員だの、頭のいい人たちは見極めも早いから、先を読んで立場を変えてしまうんですね。私たちが少数派になっていることは確かですが、その現実から出発してどう切り返してゆくのかという立場と、その現実立ってあきらめてしまつて、これまでの立場を後退させるのかという姿勢と、その対立がこれから強く現れてくると思うんです。われわれの立場は、状況に合わせて主張を後退させてゆくのではなく、言うべきことはきちんと言っていくということです。

戦前に似てきているとはよく言われること

ですが、しかし、民衆の意識は同じではありません。私たちがの世代までは、青少年時代を軍国少年として育ち、天皇のために死のうだとか、戦争に協力しないものは非国民だと非難したり、ということがあったわけですが、いかに今の若者がダメだといつても、そんな空気が支配的になつていくわけじゃありません。その違いは見ておかねばならない。

吉川 問題はその層に、運動の側がどう接触してゆけるかということですよ。最初に針生さんが文化・芸術面での運動の問題を言われましたよね。

針生 小倉利丸さんと富山大学で同僚だった浅見克彦さんというカルチュラル・スタディーズをやっている学者がいますが、彼は、権力側の情報操作のせいだ、などと左翼はよく言うが、実際にはそんなものはほとんどないというのです。ただ、イラク開戦前のアメリカを見て、大量破壊兵器の有無の調査結果を待って、安保理でイラク攻撃やむなしという決議を得てから攻撃するのか、それともそういうものを待たずに開戦に踏み切るか、という選択が提示されていた、要するにマスコミは必ずこういつたゲームの構造に組み込まれているので、情報操作などよりも、この構造のほうが問題だ、というんです。このイラク戦争での選択には、イラクに対する開戦はすべきではないという選択肢が欠けていたわけで、その場合、自分もこういうゲームの構造に乗った上で、重要な選択肢が欠落して

いるという指摘をすることが必要なんだ、ということを書いていました。『新日本文学』しかし私は、拉致問題をめぐる家族会連見事務局長のやつてきたことなどは、完全な情報操作だと思えますし、また、ゲームの構造に乗って勝負するというのがあれば、あの「阿呆で間抜けなアメリカ白人」や「華氏911」をつくり、アカデミー賞授賞式でブッシュ批判の大演説をやったマイケル・ムーアぐらいの能力が必要だと思うのですが、日本ではまだそこまでの人物が登場していませんよね。

吉川 時間もそろそろなくなりましたが、付け加えるべきことがありましたら……。

鎌田 選挙では小泉が争点を一本にしぼつたわけですが、実際には課題はいろいろあつて、それぞれごとに、多様な運動があり、そのすべてが敗北してしまったというのではないのですから、それをもういちど強化しつつ組み合わせるべく、という努力が今後非常に大切だということです。今日はこれから三里塚の管制塔闘争被告団に加えられる圧力に抗して、被告団と連帯する集会が開かれるのですが、そこでも、あの闘争に参加していた人びとが今どうしているのか、あれを終わりにしてしまわないで、これからの運動を活性化する機会にしたいと思つていっているのです。

吉川 どうもありがとうございます。

(かまた・さとし、ルポライター。はりゅう・

いちろう、文芸・美術評論家。よしかわ・ゆ

ういち、編集部。三氏とも本会会員)